

雨はれの むらさきの さわたる あさたつ ゆふる あさる ゆきの いざよふ
よこぎる くものなみといふはにたるなり、万にみそら行くも、つかひと人はいへどと
よめり、白雲のいほへなどは五百重なり、やへ雲はもの、かずのきはまりにて、重たるを云、
一切の物、かならず八重なけれども、かさなるものをば、山、かすみ、さくら、菊などをもよめり、夕
にたつと云、雲名也。本文に朝にたちて、夕にあるといへり、たゞしあさるる雲とも云、とよは
た雲は、大なるはたに似て、あかき夕の雲なり、くものはたて同物也、月 あまとぶ雲 やくも
さすいづものこら

〔日本書紀二神代〕皇孫乃離天磐座、天磐座、此云阿矩羅、且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲
之高千穗峯矣。

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

青雲能露極、白雲能墜坐向伏限。

〔萬葉集三雜歌〕幸志賀時、石上卿作歌一首

此間爲而家、八方何處、白雲乃棚引山乎、超而來二家里。

〔萬葉集二相聞〕一書曰、天皇崩之時、太上天皇御製歌二首
向南山陣雲之、青雲之、星離去、月牟離而、

〔萬葉集一雜歌〕中大兄 近江宮御宇天皇三山歌一首○中 反歌略○中
渡津海乃豐旗雲爾、伊理比沙之、今夜乃月夜、清明已曾、

〔文德實錄十〕天安二年六月庚子、早旦有白雲自艮亘坤、時人謂之旗雲。八月丁未、是夜有雲竟天、自
艮至坤、人謂之旗雲。
〔物類稱呼一〕天地夏雲、なづくも 江戸にて坂東太郎と云、坂東太郎と云、
大坂にて丹波太郎と云、